

## 「韓国語研修 短期 SEND 参加報告書」

京都大学文学部 2 回生 各務雄貴

まず主眼である三週間にわたる韓国語学習の成果についてであるが、私はこれまで本格的に韓国語を学習した経験が一度もなかったため、研修が始まった段階では文字もろくに読めなかったが、研修終了後にはレストランで注文することや、タクシーで運転手に行き先を伝え、目的地にたどり着くことまでもが韓国語でできるようになっていた。これは自分でも驚くほどの進歩で、韓国語で意思の疎通がはかれたという何物にも代えがたいこの成功体験は今後の継続的な韓国語学習の大きな支えになることは間違いないだろう。一方で、韓国語が理解できず、また表現できずに悔しい思いをすることも多々あったわけで、その経験は韓国語をもっと学びたい、習得したいという強いモチベーションを形成する源となった。いずれの場合も、これらの成功体験、非成功体験を日常的に比較的容易に得ることができる環境で韓国語学習の第一歩を踏み出せたことは非常に幸運で、この機会を頂けたことにこの上なく感謝している。

少し視点を変えて振り返ってみると、この研修は韓国語だけでなく英語について再認識する良い機会でもあったように思う。三週間毎日学校に通っていたのだが、クラスメイトが多国籍であったことと韓国語初級クラスであったということから、クラスでの共通語は英語であった。つまり英語が使えるのは当たり前で、そもそも外国語である英語で別の外国語を学習するという環境に三週間身を置いていたことになる。これは日本にはなかなか経験できない環境で、世界共通語としての英語の存在感と自身のさらなる英語力養成の必要性を感じた貴重な機会となった。また、毎日様々な国から来た学生とお互いの国の文化について語り合うなかで韓国と日本の文化の相対的な近さと、その中でも見られる差異を明確に認識することができ、本当に知的刺激を味わうことができた毎日だったと思う。

語学の授業以外では、ソウル大学の教授による週に一度の社会学の講義と、ソウル大学の日本及び東洋史専攻の学生との交流会に参加した。講義は全三回で、主なテーマはそれぞれ “memory politics”、“social distance & gender preference”、“在日コリアン”であった。いずれも韓国と日本及び東アジアとの関係性が問題となる講義で、普段意識していなかったような問題を新たな視点で考えることになった。これらの講義は自身の知識不足を痛感させるものであったと同時に、今後東アジアの国家間関係をより意識的に見つめていく重要なきっかけになったと思う。ソウル大学の学生との交流会では、日本の若者文化を紹介するプレゼンを準備し、発表することを通じて日本文化を韓国文化と比較する形で再認識することになった。また、韓国の学生に韓国における徴兵制や人間関係の在り方など色々な質問を直接聞くことができ、韓国という国の理解がかなり深まったと感じた。

海外での経験という観点では、我々が日本国内で普段偏った情報にしか触れていないという事実を痛感した。具体的には、当初韓国は反日感情が強いというイメージが多少なりともあったが、三週間の滞在中には反日について感じる場面は一度たりともなく、それどころかやさしく話しかけてくれたり、食堂ではごはんを大盛りにしてくれたりと、日本人以上に人間関係を大切に、気さくに接してくれた韓国の人々の温かい姿に何度も触れることができた。もちろんこのような姿も多様な韓国社会の一面に過ぎないという認識を忘れてはならない。また、マイノリティとして現地のルールその他に従いながら生きていくことの緊張感と刺激は、日本では得られない多様な視点を授けてくれるかけがえのない経験であった。

プログラム内容については、平日は午前9時から午後1時まで韓国語の授業で、午後に週に一回社会学の講義、最後の週にはソウル大学の学生との交流会という構成であった。私としては上で述べたように本当に多種多様な経験ができて、非常に満足している。ただ来年以降のプログラム構成の参考までに、言葉がほとんど分からない状態で異国の地で生活するというのは想像以上に精神的・肉体的な疲労・ストレスが大きいということを付け加えておく。

進路への影響については、直接的な影響は今のところ明確でないが、私はこの研修で英語と同じように今後長い時間をかけて本気で勉強するだけの魅力と価値を韓国語に見出したということは断言できる。世界で複言語主義が隆盛を極めてきているなかで、今後韓国語は私の武器になると信じている。

最後に、研修中かけがえのない経験や感情を共有し、精神的な支えになってくれた三人の仲間たちと、このような貴重な機会を設けてくださった先生方には心から感謝しています。ありがとうございました。